

「『ぼくは走り続ける』左足だけで チャレンジを続ける翔大君のストーリー」



上. 2歳の時ストライダーを買ってもらったばかりの翔大君。右足のハンディを補うため、片側だけに補助輪が付いている。ストライダーに乗るようになって友達と走り回って遊べるようになった。中. 3歳の時、ストライダーのレースで3位入賞を果たし、自信満々で表彰台に立つ翔大君。下. 小学2年生になり、現在自転車の練習に励んでいる。自由に乗りこなせるようになる日も近い。

そ

の2歳児の表情から一瞬あどけなさが消えたように感じた。5年前のストライダーカップ、スタートゲートから飛び出した翔大(しょうた)君は見事完走。ストライダーとは足で地面を蹴って進む二輪車で、ペダルは付いておらず当然補助輪も付いていない。だが、彼のストライダーだけは片側に補助輪が付いていた。翔大君は生まれつき、右足が付け根から無い。

6年前、翔大君のお母さんから「先天性の四肢障害を持つ息子をストライダーに乗せたい」と相談があったとき、正直困惑したものの、絶対に乗せてあげたいと思った。人は乗り物を手にすることによって世界が広がる。だからその乗り物はなるべく自由な乗り物であるべきだ。幼児にとつて自由な乗り物は、手ごわいながらも思うがままにコントロールできる二輪車である。翔大君に届けるストライダーは補助輪側にもしっかりとバンクできるように、地面との間に十分なクリアランスがとれる設計とし、

補助輪は片側だけに付けるようにした。

購入いただいた後、驚いたことに今度はレースに出るといふ。「大丈夫かな」と心配だったが、ストライダーカップのレース会場で翔大君を見かけた時、そんな心配は吹き飛んだ。ストライダーを見事に乗りこなす、予選レースこそ最下位だったものの、その後の敗者復活レースでは上位でゴールするほどの健闘をみせてくれたのだ。いや、ほんと「こどものちから」というものは凄い。大人が学ぶべき「ちから」がたくさん宿っている。ゴール後の表情は天真爛漫の笑顔。まるで、このゴールが彼にとつてどのような意味を持つのか分かっていないかのような様子だった。その後、ストライダーをきっかけとしてお友達もたくさんできた翔大君は練習を重ね数々のレースに参戦。3歳最後のレースでは、見事3位入賞を果たす。お母さんはその時の表彰台に立つ翔大君の誇らしげな表情が忘れられないという。それがどれほど大変なことなのか、まだ3歳の翔大君だけが分かっていた

のかも知れない。ストライダーカップには卒業がある。5歳クラス(当時は未就学児5〜6歳までしか無いため小学校に上がる前に必然的に卒業となるのだ。翔大君に最後に会ったのは、彼にとつてそんな「最後のストライダーカップ」だった。久しぶりに会う翔大君の姿は、幼さが影をひそめ立派な少年に成長していた。少し元気がなさそうだったのでお母さんに話を聞くと、最近はずいぶん勝てなくなってきたことで、モチベーションが下がりが今日も走ってくれるかどうか分からないう。体力差が顕著に出始める5歳ともなるとそれは当然のことだった。翔大君に「頑張つてね」と声をかけてその場を離れたが、レース直前の様子を遠巻きに見ると、ぐずつていてとてもレースにでられるような状態じゃない。お母さんは根気よく翔大君に話しかけていたが、しばらくして翔大君を抱っこしてスタートエリアから離れていく様子が目に入ってきた。その時のお母さんの表情は優しく微笑

みだった。自分で物事を判断できる年ごろになった翔大君の意見を尊重したのだろう。結局最後のストライダーカップで翔大君は出走しなかった。レースが終わったところお母さんと話をすると、「あれから機嫌を直し友達と一緒にストライダーで走りまくっていました(笑)」とのことだった。きつと彼にとつてはレースをすること以上に、ストライダーにのって友達と遊ぶことのほうが何倍も大事なことだったんだらうと思う。翔大君は確かに最後のストライダーカップを「走った」のだ。

そんな翔大君は現在元気真つ盛り的小学2年生。アウトドアが大好きで、持ち前のチャレンジ精神を発揮し何でも臆せずやってみる性格。そして、最近では自転車の練習に励んでいるという。以前テレビで観た「しまなみ海道」をサイクリングしてみたいとのことだ。きつとその夢は近いうちに叶い、もつと大きくどこまでも膨らんでいくに違いない。

09

B-NAVIGATORS

岡島和嗣

[STRIDER JAPAN 代表]

KAZUSHI OKAJIMA

#STRIDER #KIDS

おかじま・かずし

ストライダーを日本に持ち込み普及させた張本人。株式会社豆魚雷代表取締役社長。永遠のロック少年を目指し、いろいろと頑張っている49歳。

